

# 月と神々の食物

—— Śatapatha-Brāhmaṇa I 6, 4 (新月祭の upavasatha) ——

西 村 直 子

印度学宗教学会 論集 第34号別刷

平成19年

# RONSHŪ

Studies in Religions East and West

No. 34 2007

**Published by**

**The Association for Indology and Study of Religion**

The moon and the food of the gods  
 — Śatapatha-Brāhmaṇa I 6, 4  
 (*upavasatha* of the new moon sacrifice) —

Naoko NISHIMURA

Śatapatha-Brāhmaṇa I 6,4 (~ ŚB-Kāṇva II 6,2) which belongs to the Vājasaneyin school of the Yajurveda tells us a sequel to the myth that Indra slew Vṛtra: The gods prepare the Soma for Indra, who is emaciated after slaying Vṛtra. The Soma is the food of the gods and no other than the moon. During the night of lunar conjunction (*amāvāsya*), it visits this world and enters into the waters and plants. The gods graze cows to gather it up. They get milk which contains Soma, process it, and give to Indra. Then he recovers.

This sequel explains the origin of *sāmnāyā-*, the offering to Indra at the special new moon sacrifice. *sāmnāyā-* is a mixture of sour milk with boiled one. The former is made of the milk which is milked in the preceding evening (on the *upavasatha* day); the latter is milked and boiled in the early morning on the day of sacrifice. They are mixed just before the oblation.

The story poses a problem about when to hold *upavasatha*. Vājasaneyins connect this problem to a notion that the Soma circulates around the yonder world and this world, and reject a commonly accepted view that *upavasatha* is held on the day before conjunctive night. They discuss that it must be held on the day after the conjunctive night in order that they get the milk which contains the Soma. The identification of the Soma with the moon forms the basis for speculations that the moon's waxing and waning is linked with circulation of the Soma.

Although Vājasaneyins advocate this new method of sacrifice, this seems not to have been fully carried out. They hold *upavasatha* obviously on the day before conjunctive night just as those who belong to other schools. According to *brāhmaṇa* of expiatory offerings described in the book XI of the ŚB, one who will hold the new moon sacrifice must neither see the waning crescent preceding the conjunction in the east before sunrise (namely, on the day of oblations), nor the waxing one after it in the west after sunset (on the *upavasatha* day). We could thus follow in the footsteps of gradual progress of the theory about circulation of the Soma. In I 6,4, it is said that the moon visits this world at the conjunctive night. In XI 1,5, however, the time when Soma visits this world is revised from "the conjunctive night" to "the half month when the moon is waning". XI 1,4 represents an intermediate phase between I 6,4 and XI 1,5. This revision resolves the discrepancy between the arrangement of the *upavasatha*'s date and the theory about the circulation of Soma, and leads the evolution of a new thought about cosmic circulation of the living existence.

# 月と神々の食物

— Śatapatha-Brāhmaṇa I 6, 4 (新月祭の upavasatha) —

西村直子

## 0. はじめに

新月祭・満月祭 (*darśapūrṇamāsāu*) は、新月の日と満月の日を中心として半月毎に行われる祭式である。ウパヴァサタ *upavasatha*<sup>1</sup> (前祭) を行う準備日と献供を行う本祭日との2日間に亘って行われる。比較的新しい儀規文献 (シュラウタースートラ *Śrautasūtra*) の段階では、穀物祭 (イシュティ *iṣṭi-*) に属する祭式群の基本型として位置づけられている<sup>2</sup>。標準的な新月祭・満月祭の供物は2枚のパンケーキ (プローダーシャ *puroḍāśa*) とされるが、新月祭では1枚の *puroḍāśa* に代わってインドラ *Indra* へのサーンナーィヤ *sāmnāyya* が献供されることもある<sup>3</sup>。*sāmnāyya* とは、本祭前夜に搾乳・加熱して発酵させ

- 
- 1 *upavasathā*-は動詞 *upa-vas* 「何かの脇に侍って (*upa*) 夜を過ごす (*vas*)」の派生語で、元来「夜通し仕える事、祭火の傍に侍って神聖な夜を過ごす事」を意味したと思われる。祭式の組織化が進んだ後の段階では、穀物祭の本祭前日の行為全体を指すようになる、cf. ŚB IX 2,1,1 *upavasathīye 'han* 「upavasathaに属する日に」。upavasathaの日、祭主はヴラタ *vrata* (誓戒) の遵守に入って髪と鬚とを剃り、許可された物のみ食べ、性交を慎んで妻と共に祭場の土間に横たわり、夜を過ごす。また、祭官は本祭の準備を行う。Indraへの *sāmnāyya* 献供を行う新月祭の場合には、牛の放牧と夜の搾乳とが準備の一部として位置づけられる。西村直子『放牧と敷き草刈り—Yajurveda-Saṁhitā冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究—』(東北大学出版会、2006) p.15 n.8 参照。
  - 2 例えば、ĀpŚrSū XXIV 3,32 [Paribhāṣā] 参照。BaudhŚrSū XXIV 5:188,10–11 [Paribhāṣā] も同じ趣旨をいうものと考えられる。『放牧と敷き草刈り』p.15 n.9 参照。
  - 3 白 YV 学派 (ヴァージャサネーイン *Vājasaneyin* 派) の ŚB より古い時代に位置づけられる黒 YV 学派の brāhmaṇa では、満月祭と新月祭との間の供物の相違は明記されていない。ŚB では、満月祭には Agni に対する8皿分の *puroḍāśa* (*aṣṭākapāla-puroḍāśa-*、8枚の *kapāla* を組み合わせて1枚の台にする) 1枚と、アグニ *Agni* とソーマ *Soma* とに対する11皿分 (*ekādaśākapāla-*) の *puroḍāśa* 1枚とが、また新月祭では *Agni* に対する8皿分の *puroḍāśa* 1枚と、*Indra* と *Agni* とに対する12皿分

た酸乳と、本祭当日の朝に搾乳して加熱した乳とを献供直前に「混ぜ合わせ」たものである。

新月祭の upavasatha (前祭) について、シャタパタブラーフマナ Śatapatha-Brahmaṇa (ŚB) I 6,4~ŚBK II 6,2 (紀元前650~600年頃?) は、朔の夜に先行する日中にこれを開始するという従来の説を挙げて批判する。同書は Indra によるヴリトラ Vṛtra 殺しの後日譚 (後述) に Soma の循環説を結びつけて sāmnāyā の由来とし、朔の夜が明けた日に upavasatha を行うという特別な見解を打ち出し、新たな理論の提出を試みる。

ŚB が所属するヤジュルヴェーダ Yajurveda (YV) 学派の文献は、祭式の執行を司るアドウヴァリユ Adhvaryu 祭官が唱えるマントラ mantra (祭詞) と、mantra およびそれを伴う祭式行為の意義付け、神学議論等を中心に編集されている。各ヴェーダ学派のブラーフマナ brāhmaṇa の中でも最古層に位置する YV 四学派の brāhmaṇa<sup>4</sup> の中、今回扱う ŚB は従来 of 伝統 (黒 YV 学派) に対して革新的立場を取る Vājasaneyin 派 (白 YV 学派) に属し、新たな祭式解釈

(dvādaśakapāla-) の puroḍāśa 1 枚、又は Indra に対する sāmnāyā とが、供物として挙げられている。後の ŚrSū の段階では、各学派一致して ŚB と同様の供物を規定している。sāmnāyā の献供資格をめぐるは、黒 YV 学派の中でも新層に位置するタイッティリーヤ Taittirīya 派と Vājasaneyin 派との間に議論のあったことが窺われる。前者は Soma 祭を行っていない者 (āsomayājīn-) は sāmnāyā 献供を行う事ができない (その場合は Indra-Agni への puroḍāśa 献供を行う)、と主張し (TS II 5,5,1<sup>p</sup> および ĀpŚrSū I 14,8)、後者はこれに批判的である (ŚB I 6,4,9-11)。古層に位置する MS IV 1,3<sup>p</sup>~KS XXXI 2<sup>p</sup> [新月祭・満月祭、搾乳と dadhi 製造] には、sāmnāyā の献供資格に関する明確な規定はないものの somapithā- (Soma を飲む事) への言及が見られる (cf. TB III 2,3<sup>p</sup>)。これは、献供資格の問題と何らかの関係があるかもしれない。このような議論が見られることは、sāmnāyā の献供が何らかの点で特殊な位置にあった事を示唆しよう。詳細については『放牧と敷き草刈り』 pp.136-137並びに pp.149-151を参照。

- 4 黒 YV 学派ではサンヒター Samhitā 『本集』にマントラ mantra 部分 (祝詞集) とブラーフマナ brāhmaṇa 部分 (祝詞の解釈を中心とする神学議論など) とを併せて編集している。独立した『Brāhmaṇa』という名を持つ文献を伝承するのは Taittirīya 派のみであるが、この Taittirīya 派の Brāhmaṇa にも Taittirīya-Samhitā と同様に、mantra 集成の章と brāhmaṇa の章とが混在している。一方、リグヴェーダ Ṛg-Veda、アタルヴァヴェーダ Atharva-Veda、サーマヴェーダ Sāma-Veda、白 YV の各学派では、Samhitā に祭式の各場面で唱えられる mantra (祝詞) を集成し、Brāhmaṇa で mantra の解釈及び行作に関する規定等を集成している。『放牧と敷き草刈り』 n.2 及び p.16 ff. 参照。

及び神学的議論の記述に富むものである。ŚB が従来の説に反して upavasatha の日を定めた背景に、この Vājasaneyin 派独自の神学議論の展開が深く関わっている。

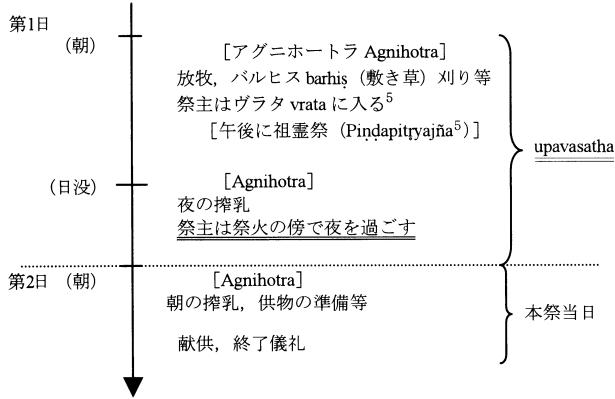


図1 新月祭日程表<sup>5</sup> (Indra への sāmnāyā 献供を行う場合)

ŚB の第 I 巻は、新月祭・満月祭に関する議論の集成である。その中の I 6,3-4 に、供物 (→ n.3) の由来を述べるものとして Indra による Vṛtra 殺しの神話が含まれている<sup>6</sup>。

Indra は最古のリグヴェーダ Ṛg-Veda 以来、数々の武勇を以て讃えられる神である。Vṛtra 殺しは Indra の功績の中でも大きな位置を占めている。RV に歌

- 5 祭主がどの時点で vrata に入るのかという判断については後代の儀規文献の段階で様々な見解があったことが知られている。cf. BaudhŚrSū XX 1:4,9-13 → 『放牧と敷き草刈り』 p.105。この問題に関しては『放牧と敷き草刈り』 pp.40ff. 参照。毎月行われる祖霊祭 (ピンダピトリヤジュニヤ Piṇḍapitṛyajña) は、一般に新月祭前日の午後、即ち、新月祭の upavasatha の日に行われる。その由来を語る TS II 5,3,6-7<sup>a</sup> 及び TB I 3,10,1-2<sup>a</sup> では、「先立つ日中に (pūrvedyūs)」の語によって「本祭に先立つ日中」が意図されている。ŚB II 4,2,7-8 は「月が東にも西にも見えない時」[午後]に、Piṇḍapitṛyajña を挙行すべきであるとしており、朔の夜に先立つ午後か、朔の夜が明けた後の午後であるのかについては、明言されていない。Cf. n.22.
- 6 Vṛtra 殺しの神話は新月祭・満月祭のほか、4カ月ごとに行うチャートウルマースヤ Cāturmāsya 祭、種々の Soma 祭等、様々な祭式に関する記述の中に現れる。vṛtrā- は、元来は「障碍、障碍物」を意味するが、RV で既に āhi-「蛇」の姿を持つものと想定されている。ŚB I 6,3-4 における Vṛtra 殺しの神話とそれに纏わる種々の神学議論については、土山泰弘「新月祭・満月祭と月」、『宗教研究』262 (1985), pp. 27-46 参照。

われる Vṛtra 殺しの主題は、最終的には河川への水の回復（雪解け、または雨期の到来）を象徴する「水の解放」の神話へと集約される。これに対し、散文としては最古の YV 学派の brāhmaṇa では、概ね次のようなエピソードが伝えられている：Indra に息子ヴィシュヴァールーパ Viśvarūpa を殺されたトゥヴァシュトリ Tvastṛ は、Indra を除け者にして Soma 祭（Soma の搾り汁を供物とする祭式）を挙行了した。しかし、Indra はその Soma を奪って飲んでしまう。Tvastṛ は怒り、Indra が飲み残した Soma から魔物 Vṛtra を生み出して Indra を殺そうとする。ところが、Vṛtra を生み出す為の呪文を Tvastṛ が言い違えた為、Vṛtra は逆に Indra に殺されてしまう。

ŚB ではこの神話の後日譚に基づいて新月祭の供物の由来を語るが、その物語はより古い黒 YV 学派の伝承よりも複雑なものとなっている。黒 YV 諸学派では、Vṛtra を殺した後に Indra の体内から出て地中へと入り込んだインドリヤ *indriyā-*（感官の力）及びヴィールヤ *vīryā-*（生命力・英雄的な力）を集めて Indra を回復させるというエピソードが *sāmnāyya* の因縁譚として語られている。マイトラヤニー・サンヒター *Maitrāyaṇī Saṁhitā* (MS) 及びカータカサンヒター *Kāthaka-Sāṁhitā* (KS) では *Cāturmāsya* (→ n.6) の章にこのエピソードを置いている (MS I 10,5:146,2-5<sup>p</sup>~KS XXXVI 1:68,5-69,13<sup>p</sup>)。Indra が失った生命力（英雄的な力）を集め寄せるために、神々が勤め励んだという内容である<sup>7</sup>。また、この箇所には新月祭・満月祭への言及はない。新月祭における *sāmnāyya* の因縁譚としての当該神話の記述はタイッティリーヤサンヒター *Taittirīya-Sāṁhitā* (TS) II 5,2-3<sup>p</sup> に見られる。Indra に助けを求められたプラジャーパティ *Prajāpati* は、地中に入り込んだ *indriyā-* *vīryā-* を牛達に回収させ、搾乳して Indra に与える。Indra に再び力がよみがえるまでに乳を何度か加工しており、ŚB と近い内容を含んでいる<sup>8</sup>。この *Taittirīya* 派の見解が ŚB の議論を準備したもの

7 MS I 10,5:146,2-5<sup>p</sup> *indro vai vṛtrām ahant. sā viśvaḥ vīryeṇa vyārcchat. tād idāṁ sārvaṁ prāviśad apā ośadhīr vānaspatīms. tēna devā āsrāmyams. tāt sāmanayams. tāt sāmnāyyāsya sāmnāyyavām. tād yā evāṁ vidvānt sāmnāyyēna yājata ṛdhnoti* 「Indra は Vṛtra を殺したのだ。彼は生命力を散りぢりに失った。すると、この [生命力] のすべては水達に、草達に、樹木達に、入り込んだ。そのことに（生命力の回収に）、神々は勤め励んだ。それを彼らは集め寄せた。それが *sāmnāyya* の *sāmnāyya* たる所以である。それ故、このように知っている者が *sāmnāyya* によって祭式を行うならば、彼は達成する」。

と考えられる。これらに対し、ŚB I 6,4では、憔悴した Indra を回復させる為に必要な Soma を牛達に集めさせ、Soma を含む乳を Indra に与えたと述べられる。Soma の存在を導入し、sāmnāyya の因縁譚を新たに展開させている。その記述は新月祭の準備を始める（即ち upavasatha を行う）べき日（朔の当日か、或いは翌日か）や神々の食物となる供物の循環といった複雑な神学解釈にまで及んでいる。とりわけ、この「神々の食物となる供物の循環」という理論は、後のウパニシャッド Upaniṣad に展開される議論の背景として重要な位置を占めている<sup>9</sup>。本稿では、この神話に基づいて upavasatha を行う日を定める ŚB の思想史上の問題を確認したい。

なお、本稿で引用する ŚB I 6,4は、原則として西村『放牧と敷き草刈り』（→ n.1） pp.158-164からの再録である。訳を改めた部分もあるが、論旨を左右するものではない。重複する脚注の中、重要なものについては本稿に再掲する。

## 1. Indra による Vṛtra 殺しの後日譚——新月祭における供物の由来

### 1-1. Indra-Agni に対する12皿分の puroḍāsa : I 6,4,1-3

Indra は自分が Vṛtra 殺しに失敗したと思い込み、憔悴して姿を隠す。神々は Indra を探し、Agni が朔の夜に彼を見つけ出す。そこで神々は Indra と Agni とに対し12皿分のパンケーキを捧げる：

*indro há yatra vṛtrāya vājraṃ prajāhāra | só 'balīyān mānyamāno nāstrṣṭīva*

8 『放牧と敷き草刈り』 pp.152ff. 参照。

9 ŚB XI 6,2,1-10に述べられるジャナカ Janaka 王の五火説では、従来のアグニホートラ Agnihotra 理論を基盤としつつ、献供 (*āhuti-*) される乳が宇宙次元での献供により水蒸気 (*mārici-*)、月、植物、食物、精液へと順次変換し、ついに人間 (*pūruṣa-*) の誕生をもたらす経緯が説明される。その基盤となった理論の一つが当該ブラーフmana ŚB I 6,4の中の「朔の夜に Soma たる月は地上の草・水に宿り、その草を食べ、水を飲んだ牝牛の乳を献供することによって再び月が空に現れる (→ 3-2.）」という観念である。Janaka 王の五火説は後のジャイミニヤブラーフmana Jaiminiya-Brāhmaṇa、ブリハッドアーラニヤカウパニシャッド Brhad-Āraṇyaka-Upaniṣad、チャンドーギヤウパニシャッド Chāndogya-Upaniṣad 等において死後の人間の運命を論じる二道説と結合し、新たな展開を遂げる。この一連の問題については：SAKAMOTO-GOTŌ, Junko, “*katham-katham agnihotrām juhutha*-Janakas Trickfrage in ŚB XI 6, 2,1-“(Fs. Narten, Dettelbach 2000, pp.231-252.); “Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehredes Königs Janaka” (Kultur, Recht und Politik in muslimischen Gesellschaften, Bd. 1, Ergon Verlag 2001, pp.158-167)。



*bībhyan nilayāṃ cakre. sá párah̄ parāvato jagāma. devā ha vai vidāṃ cakrur. ható vai vṛtró 'thēndro nyāleṣṭēti. ||1|| tām ānveṣṭuṃ dadhrire | agnīr devātānām hīraṇyastūpa ṛṣīṇām bṛhatī chāndasām. tām agnīr ānuviveda. tēnaitām rātrim̄ sahājagāma. sá vai devānām vásur. vīrō hy eṣām. ||2|| té devā abruvan. | amā vai no 'dyá vásur vasati yó naḥ právātsid̄ úti. tábhyām etád yáthā jñātūbhyām vā sakhībhyām vā sahāgatābhyām samānām odanām páced̄ ajām vā tád āha mānuṣām havír devānām, evām ābhyām etát samānām havír nīravapann, aindrāgnām dvādaśakapālam̄ puroḍāsam. tasmād̄ aindrāgnó dvādaśakapālah̄ puroḍāso bhavati. ||3||*

Indra は、彼が Vṛtra にヴァジュラ vajra (棍棒) を打ち据えた時に、その彼は自分が (以前より) 力弱くなったように思い、「私は打ち倒さなかった」と怖れ、姿を隠した。彼は最果ての地へと向かった。神々は知ったのだ。「Vṛtra は殺されたのだ。そして (= それなのに) Indra は姿を隠した」と。||1|| 彼 (Indra) を捜索する事に [神々は] 取り掛かった、神格達の中では Agni が、聖仙達の中ではヒラニヤストウパ Hiraṇyastūpa が、韻律達の中ではブリハティー Bṛhatī が。彼を Agni は見つけ出した。彼と共にこの夜に<sup>10</sup> [Agni は] 戻った。彼が神々の中の良き者なのだ。彼らの中の勇者だからである。||2|| その際、神々は言った。「家に、今日は、我々のもとから旅に出ていた我々の中の良き者が留まるのだ。」と。彼ら二人 (Indra と Agni) の為にこの際、あたかも連れ立ってやって来た 2 人の近親者か同僚かの為に、共通の玄米粥または山羊を (人が) 調理する事があるように——これは人間に関する場合で、神々に関しては供物である——、同様にこの 2 人 (Indra と Agni) の為に、この際、[神々は] 共通の供物を準備して捧げた、(即ち) Indra と Agni とに捧げる 12 皿分のパンケーキを。それ故に、Indra と Agni とに捧げる 12 皿分のパンケーキが用いられる。||3||

## 1 - 2. Indra に対する sāmnāyā : 16,44-9

神々は Indra と Agni とにパンケーキを捧げたが、Indra は回復しなかった。Indra を満足させるものは Soma 以外にあり得ない。Soma は月であり、朔の夜には地上の草や水の中に入り込んでいる。そこで神々は、草を食べ、水を飲んだ牝牛達の乳を搾ることで Soma を集め、酸乳 (ダディ *dādhi-*) となったものを Indra に与える。しかし、これにも Indra は満足しない。次に、神々は熱し

10 *etām rātrim̄* : 時を指定する Acc.。 Cf. Goṛō, Toshifumi, "Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbums" (Indogermanische Syntax, Wiesbaden 2002, pp.21-42), p.36f.

た乳 (シュリタ *śrta-*) を与える。遂に Indra は力を取り戻す。

祭式では、酸乳と加熱済みの乳とを別々に準備し、献供直前に1つの柄杓の  
中で混ぜ合わせ、火の中に注ぎ入れて神々に捧げる。酸乳には、献供日前夜に  
搾った乳を加熱し、アータンチャナ *ātāncana-* (予め用意しておいた種菌用の  
酸乳) を加えておいたものを用いる。また、これと混ぜ合わせる乳には、当日  
朝に搾乳、加熱したものを用いる<sup>11</sup>。I 6,4,8に、*dādhi-*: *dhinoti* 滋養を与える、  
及び *śrta-*: *śrayate* 寄り添う、の神学的語源説が見られる。

*sá indro 'bravīt. | yātra vai vṛtrāya vājraṃ prāharaṃ tād vyāsmaye. śa  
krśā ivāsmi. ná vai medāṃ dhinoti. yān mā dhināvāt tán me kurutēti. tathēti devā  
abruvan. ||4|| té devā abruvan. | ná vā imām anyāt sómād dhinuyāt. sómam evāsmāi  
sāmbharāmēti. tāsmai sōmaṃ sāmabharann. eṣā vai sōmo rājā devānām ānnaṃ yac  
candrāmāḥ. śa yātraisā etām rātrimṃ ná purāstān ná pāścād dadṛśe tād imām lokām  
āgachati. śa ihāvāpās cāuṣadhīś ca prāvīśati. śa vai devānām vāsv. ānnaṃ hy eṣām  
tād. yād eṣā etām rātrim ihāmāvāsati tāsmād amāvāsyā nāma. ||5|| tam góbhīr*

- 11 以上の作業については、例えば、cf. *KātyŚrSū* IV 2,38–40: *parikṣālanāntaṃ kṛtvā  
sāyamdohanam āhṛtya prātardohaṃ śrapayitvābhihāryodvāsyo bhāv anakti. | śrtasyagre  
'vadyatīti śruteḥ. | sam asya mārjanam* 「[搾乳桶の] 洗浄を最後とする [一連の] 行  
作を為してから、夜に搾乳したものを持ってきて、朝に搾乳したものを加熱してか  
ら [グリタ *ghṛta* (発酵バターオイル) を] 注ぎかけ、火から下ろし、[夜に搾乳し  
たものと朝に搾乳したものと] 両者に [ *ghṛta* を] 塗りつける。加熱した [乳]  
の一部を最初に [ジュフー *juhū* (柄杓) の中に] 取り分ける、[その後で酸乳を取り  
分ける] とシュルティ *Śruti* に説かれている。各々の拭い清めが [行われる]」。  
この箇所と言及される *Śruti* は、TS を意図している可能性がある。n.16参照。Cf.  
*BaudhŚrSū* I 17:25, 14–18: *athopastūrya diviḥ puroḍāśasyāvadyann āh-  
(endrāyānubrūh-) itī (mahendraya-) eti vā yadi mahendrayājī bhavati. diviḥ  
puroḍāśasyāvadyati diviḥ śrtasya dvir dadhno. 'bhigḥārayati. pratyanakty.  
atyākramyāśrāvāyāh-(endram yaj-) eti. (mahendram) itī vā yadi mahendrayājī bhavati.  
vaṣaṭkṛte juhoti* 「次に、[アージャ *āja* (発酵バター) または *ghṛta* を柄杓 *juhū* に下  
地として] 塗り広げてから、2回 *puroḍāśa* の一部を切り分けつつ、(Indra の為に  
*Anuvākya* を唱えろ) と [ホートリ *Hotṛ* 祭官に] 言う。或いは、[祭主が] マヘン  
ドラ *Mahendra* を祭る者である場合には、(Mahendra の為に) と [言う]。2回  
*puroḍāśa* の一部を切り分ける、2回加熱した [乳] の一部を、2回酸乳の一部を。  
その上に [ *ghṛta* を] 滴らせる。[その *ghṛta* を供物に] 塗りつける。[アーハヴァニー  
ヤ *Āhavanīya* 祭火の南側へと] 越え歩み、(Indra を祭れ) と言う。[祭主が] *Mahendra*  
を祭る者である場合には、(Mahendra を) と [言う]。[*Hotṛ* 祭官が] ヴァシャット  
*vaṣaṭ* と発語してから献供する」～*ĀpŚrSū* II 20,2–4。

*anuvīṣṭhāpya sāmabharan. | yād oṣadhīr āsnaṃs tād oṣadhibhyo. yād apó 'pibaṃs tād adbhyaś tām. evāṃ saṃbhīṣṭyātācyā tīvrīkīṭya tām asmāi prāyachan. ||6|| sō 'bravīt. | dhinōty evā medaṃ nēva tū māyi śrayate. yāthedāṃ māyi śrāyātai tathōpajānītēti. tām śrītenaivāśrayan. ||7|| tād vā etāt | samānām evā sāt páya evā sād índrasyaivā sāt tát púnar nānevācakṣate. yād ābravīd dhinōti mēti tāsmād dādhy. ātha yād enaṃ śrītenaivāśrayaṃs tāsmāc chrītam. ||8|| sá yāthānsūr āpyāyeta | evāṃ āpyāyatāpa pāpmānaṃ harimāṇam ahataiṣā u āmāvāsyaśya bāndhuḥ. sá yó haivāṃ vidvānt samñayaty evāṃ haivā prajāyā pasūbhir āpyāyatē 'pa pāpmānaṃ hate. tāsmād vai sāmñayet. ||9||*

その際 Indra は言った。「私が Vṛtra に vajra を打ち据えた時に、その際私は顔が引きつった<sup>12</sup>。かくて私はまさしくやつれている。これでは私に滋養を与えないのだ。私に滋養を与えることになる物、それを私の為に君達は作れ」と。「そのとおりに（＝そうしよう）」と神々は言った。||4|| その際神々は言った。「Soma 以外の物は彼に滋養を与えることができない。他ならぬ Soma を彼の為に我々は集めよう」と。彼の為に Soma を〔神々は〕集めた。輝く月ならば、これが神々の食物である王 Soma なのだ。その際、これ（月＝王 Soma）が、この夜の間<sup>13</sup>、東にも西にも見えていない時には、その時は、この（地上の）世界に彼（王 Soma）はやってくる。彼は他ならぬこの地上で水達と草達とに入り込む<sup>14</sup>。彼（王 Soma）が神々の中の良き物（財産）なのだ（→ n.15）。それ（Soma）<sup>15</sup>は彼らの食物であるから。彼がこの夜の間この地上の家に留まること、それ故にアマールヴァースヤー amāvāsya（朔の夜）という名がある。||5||〔神々は〕それ（王 Soma）を求めて牛たちを配備し、集めた。〔牛達が〕草達を食べた時は、その事によって草達から、水達を飲んだ時には、その事によって水達からそれ（Soma）を。そのようにして集め、固め、刺激ある物と為して、それを彼（Indra）に〔神々は〕差し出した。||6|| 彼（Indra）は言った。「これ（酸乳 dadhi-）は私に滋養を与えはするが、しかし、

12 Cf. Gorō, Toshifumi, Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen (Wien 1987), p.335.

13 → n.10.

14 → n.9.

15 *tād* は Soma を指す代名詞が、論理的述語名詞 *annam* (neut.) への一致によって中性で現れたもの。直前の文 *sá vai devānāṃ vāsu* ではこの一致が見られない。この場合は *sá* で表される Soma が未知の情報として強く指示されており、日本語では「神々の中の良き物とは彼なのだ」、又は「彼が神々の中の良き物なのだ」と訳せる。

私に寄り添いはしない。これが私に寄り添うことになるように、そのように君たちは工夫せよ」と。彼に、加熱した (*śṛta-*) [乳] を彼ら (神々) は寄り添わせた。||7||<sup>16</sup>その際、この事によって全く同一の物であるのに、乳に他ならないのに、Indra に属する物に他ならないのに、しかし、これを丁度様々に人々は呼ぶのだ。彼が「これは私に滋養を与える (*dhinoti*)」と言った、その故に [それは] *dadhi* 酸乳である。次に、当人に他ならぬ温めた [乳] を [神々が] 寄り添わせた (=付与した、彼の身に止まるようにした *ásrayan*)、その故にそれは *śṛta* 加熱した [乳] である。||8|| すると丁度 *Soma* の茎が (搾られた後に水の中で) 膨らむ (増大する、力で漲る) ように、そのように彼 (Indra) は力で漲った。悪を、[顔色の] 黄色いこと<sup>17</sup>を打ち退けた。他方、これが新月に属する [供物] (= *sāmnāyā*) の結びつき (因縁) である。その際、このように知っている者が *sāmnāyā* [の献供] を行うならば、まさしくこのように、子孫、家畜達によって増大する事になる。彼は悪を打ち退ける。それ故に、人は *sāmnāyā* [の献供] を行うべきなのだ。||9||<sup>18</sup>

## 2. 月—*Soma* の同置と乳 (16,4,5-6 → 1-2.; 16,4,15 → 3-2.)

月と *Soma* との同置<sup>19</sup>は、前述の I 6,4,5に明記されている。この同置に基づき、「朔の夜 *amāvāsyā-*」の語について、「*Soma* たる月が一晩中東にも西にも見えない朔の夜には、*Soma* は地上にやってきて、水や草達に入り込んでいます。

- 16 TS II 5,3,2-4<sup>e</sup> では① *pratidūh-* (搾りたての乳)、② *śṛta-* (加熱した乳) の順で与えるが、いずれも Indra を回復させる事ができず、3番目に *dādhi* (酸乳) を与えて成功する。TS II 5,3,4-5<sup>e</sup> では、献供時 (2日目) に酸乳と加熱した乳とのどちらを先に取り分けるべきか、という問題提起が為されている。TS ではこの神話に従い、始めに加熱した乳を、次に酸乳を取り分けるべく規定している。この議論の中に引かれる酸乳を先にすべきであるというブラフマヴァーディン *Brahmavādin* 「ブラフマンについて議論する者」の説は、*ŚB* の神話の内容と一致している。→ n.8.
- 17 *harimān-* 「黄色さ」は一般的に黄疽と訳されることが多いが、顔色の悪さ、青ざめていることを意味すると思われる。現代ペルシャ語には顔色が悪いことを言う *zard-chehr*, *-chehre* 「黄色い顔、頬をしている」という表現がある (堂山英次郎氏の教示による)。
- 18 これに続く *ŚB* I 6,4,10-13には、*sāmnāyā* の献供資格についてと新月祭の供物によって悪を完全に殺すことが議論されており、本論とは直接関係しない。『放牧と敷き草刈り』 pp.162-163にテキストと訳がある。
- 19 月と *Soma* との同置は、RV の新層にまで遡り得る。Cf. OLDENBERG, *Religion des Veda*<sup>2</sup> (Stuttgart, Berlin 1923), p.175f.

つまり、神々の財産(*vāsu-*)たる Soma が地上の家に (*amā*) 留まっている (*vasati*)。それ故に、「朔の夜 *amāvāsyā-*」という名がある、との神学的語源説が語られる<sup>20</sup>。

朔の夜に Soma (月) が入り込んだ草を食べ水飲んだ牝牛の乳には、Soma が含まれている、と ŚB では説明する。朔の明るる日に Soma は牛達によって集められ、その乳を搾る事で人間は Soma を得る事ができる。そういう Soma を含む乳を供物として捧げた結果、乳に含まれていた Soma は天界へ届けられ、献供を行ったその日 (正確には朔の翌々日) の日没時、西の空に、月が再び姿を現す (→ 3-2., 16,4,15)。

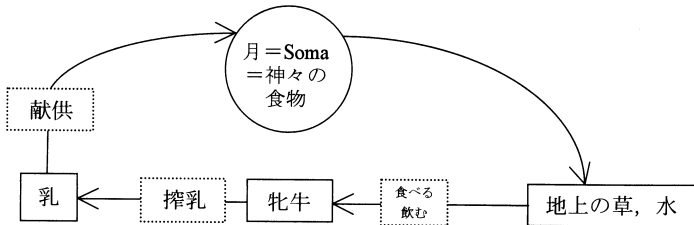


図2 Soma の循環

### 3. upavasatha を行うべき日

#### 3-1. 他学派の見解—— *amāvāsyā* (朔の夜) に先立つ日中 : 16,4,14

ŚB が他学派<sup>21</sup>の見解として挙げるのは、*amāvāsyā* (朔の夜) の日、即ち朔の夜に先立つ日中に *upavasatha* を行うという説である。他学派の見解として『『明朝は [月が] 昇らないだろう』と (月を) 見て *upavasatha* を行う』という説が述べられる。満月から次第に欠けていった朔の直前の月は、明け方に東の空に見える (有明の月)。朔の夜にはその有明の月さえも昇らない。この夜、神々の食物たる Soma は天界から姿を消している。それに先立つ日中に供物を捧げておけば、神々のもとから食物が絶えることはない。

ŚB が否定するこの見解は黒 YV 学派或いは同じ Vājasaneyin 派内部の別な見

20 M. DEEG Die altindische Etymologie und nach dem Verständnis Yaska's und seiner Vorgänger (Dettelbach 1995), pp.195f. 参照。

21 テキストでは *éke* 「ある人々は……, ……する人もある」と示されている。「同じ Vājasaneyin 派内部の一部の人々」の意である可能性もある。

解を持つグループに属するものと思われるが、黒 YS の br. では upavasatha と月の出、朔の夜等との関係に対する明確な言及は見られない<sup>22</sup>。

*tād caīke | dr̥ṣṭvōpavasanti. śvó nōdetēty. adō haivā devānām āvikṣiṇam ānnaṃ bhavaty. āthaibhyo vayām itā upaprādāsyaṃ itī. tād dhī sámṛddhaṃ yād akṣiṇa evā pūrvasminn ānnē 'thāparam ānnaṃ āgāchati. sá ha bahvannā evā bhavati...* (以下3-2. 参照) ||14||

又、その際、ある人々は[月を]見てから upavasatha を行う。「明朝は[月が]昇らないだろう<sup>23</sup>」と[考えて]。「かの[世界]ではつまり、神々の食物は[未だ](欠けて)なくなっていないことになる。そこで、当の者達(神々)の為に我々はここから贈り物を足そう」と[考えて]<sup>24</sup>。前の食物がなくなっていないうちに、更に、後の食物が来れば、それは完全な繁栄(完備)であるから。彼(祭主)は他ならぬ多くの食物を持つ者となる[ことになる](以上、他学派<sup>21</sup>の見解)。... ||14||

### 3-2. ŚB I 6,4の見解——朔の夜の後の日中：I 6,4,14-15

ŚB において従来の方法に対する批判は I 6,4,14 (前述)の後半に述べられて

22 TS II 5,6,3-4<sup>o</sup> の記述が<sup>o</sup> upavasatha を行う日の規定と関連しているかどうか、検討を要する：*devā vā āhaḥ yajñīyaṃ nāvindan. té darśapūrṇamāsāv apunan. tāu vā etāu pūtāu mēdhyau yād darśapūrṇamāsāu. yā evām vidvān darśapūrṇamāsāu yajate pūtāv evāinau mēdhyau yajate.* 「神々は祭式に与る日を見出さなかった。彼らは新月の日と満月の日との両日を清めた。その際、新月の日と満月の日とであれば、その両者はこの事によって、清められている、祭式に適う[日]である。このように知りつつ新月祭・満月祭を祭る者は、清められた、祭式に適う当の両[日]に祭ることになる」。更に、これに続く以下の文は、新月の日と満月の日に祭主が vrata に服すべき事、即ち朔の日と満月の日とが upavasatha の日である事を示唆している可能性もある：*nāmāvśyāyām ca paurṇamāsyaṃ ca strīyam ūpeyāt* 「朔の夜と満月の夜とに女性に近づくべきではない」。尚、後の儀規文献(Śrautasūtra)では、朔の当日、翌日等、諸説のあったことが窺われる、cf. BaudhŚrSū XX 1:2,7-3,4. 更に、暦の上での1日の始まりが夜と朝との何れであったか、確実な証拠は得られない。

23 朔の直前の月(の出)は、日の出の直前に東側に見られる。

24 ここに述べられる他学派の見解について、Kāṇva 派では *śvó nōdetēti* を欠く以下の文が伝承されている：*II 6,2,11 : tād dhāike dr̥ṣṭvōpavasanty adā evādō devānām ānnaṃ āvikṣiṇam ity. āthaibhyō vayām itā upaprādāsyaṃ itī* 「その際、ある人々は[月を]見て upavasatha を行う、『まさしくあそこに、(つまり)かの[世界]では、神々の食物は[未だ](欠けて)なくなっていない』と、『そこで、この者達の為に我々はここから贈り物を足そう』と[考えて]」。

いる。まだ月が見えている、朔の夜に先立つ日中に upavasatha を始めて草を食べた牛から搾乳した乳を献供しても、その乳の中に Soma は含まれておらず、天界に Soma を返すことはできない。従って、朔の夜の次の夜に再び天界に現れた月 (Soma) は、地上での祭式と無関係に生じた事になってしまう。この見解には地上に降りてきた Soma を天界に戻すという視点が欠けており、朔の後に再び月が現れるという現象を説明できない。SB では、朔の後に現れた月を目に見える形で示される祭式の効力と位置付け、朔の夜が明けた日に upavasatha を行うという方法を説く。草と水とに Soma が宿るのは、空に月が見えていない朔の夜 (amāvāsyā) である。その明るる日、Soma が宿る水や草を食べた牛の乳には、Soma が含まれていることになる。そういう乳を sāmṇāya として献供することによって、日没後の西の空に月が再び現れる。月と同置される神々の食物 (Soma) が天界と地上との間を循環することになるように、朔の夜の明るる日に upavasatha を行い、その翌日に本祭を行って乳に含まれている Soma を天界に戻すのである。

(3-1. からの続き) ... *ásomayāji tú kṣīrayājy. àdó haivá sómo rājā bhavati. ||14|| átha yáthaivá purá | kévalīr ośadhīr aśnānti kévalīr apāḥ pībanti tāḥ kévalam eva páyo duhrá evaṃ tād. eṣá vai sómo rājā devānām annāṃ yac candrāmāḥ. sá yátraīṣā etām rátriṃ ná purástān ná páścād dadṛśe tād imāṃ lokām āgachati. sá ihāpás cáuśadhīs cá práviṣati. tād enam adbhya ósadhībhyah sambhṛtyāhutībhyó 'dhi janayati. sá eṣá āhutībhyo jātāḥ páścād dadṛśe. ||15||*

……しかし、[朔の夜に先立つ日中に upavasatha を行う人は] 生乳で祭る者であり、Soma で祭らぬ者である。他ならぬかの世界において、つまり、王 Soma が生じる事になる。||14|| すると、それはまさしく丁度、[朔の夜が来る] 前に [牛達が] 草達だけを食べ、水達だけを飲み、そのようにして (tāḥ) 彼ら [牛達] が専ら乳だけを出すようなものである<sup>25</sup>。輝く月ならば、これが王 Soma、神々の食物なのだ。そこで、これ (= 月) がこの夜の間東にも西にも見えていない時には、その時、[月は] この世界へやってくる。それはここ (地上) において水達と草達とに入りこむ。その事によって当の物 (= Soma) を水達、草達から集めて、献供達<sup>26</sup>から [天界に] 生み出す。そこで [月は]

25 この文の後に、Kāṇva 派では以下の文を伝承している、II 6,2,11 : *tāsmād yadāivāinaṃ ná purástān ná páścād pásyet tárhy evópavaset* 「それ故、まさしく当のもの (月) を東にも西にも見るができない時、他ならぬその時に upavasatha を行うべきである」。

献供達から生まれ出て、ここに、西に見えている。||15||

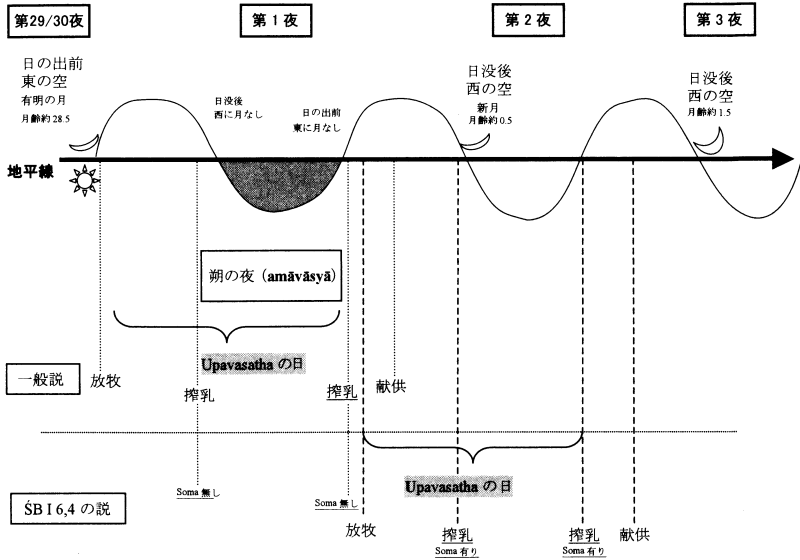


図3 一般説との比較

ただし、図に示したとおり、SB が upavasatha として定める日の日没後、既に西の空の地平線近くに月が現れているはずである。この点については後で述べる (→ 4.)。

なお、Vājasaneyin 派の儀規文献であるカーティヤーヤナシュラウタストラ Kātyāyana-Śrautasūtra IV 2,1では、upavasatha を行う際に朔の夜に先立つ日中と朔の夜が明けた日中との2つの選択肢が規定されている：

*śvo nodetety adṛṣṭe vā parṇasākhām chinatti śamīlīm ve (-ṛṣe tvā-(VS I 1))ety (ūrje tvā-(VS I 1))eti vā.*

「翌朝は [月が] 昇らないだろう」と [考えて]、或いは [月が] 見えなかった後で、Parṇa 樹の枝を切断する、或いはシャミー Śamī 樹の [枝] を、〈滋養の為に君を〉と [唱えながら]、或いは 〈栄養の為に君を〉と [唱えながら]。

26 āhutibhyas と pl.で言われているのは、1回の祭祀において複数回の献供を行う為であると考えられる。また、新月祭は祭火を設置した者が必ず定期的に行わねばならない祭祀であり、複数の祭主が新月祭を同時に挙行することを考慮した可能性も否定できない。



## 3-3. 月～神々の食物～供物の関係：I 6,4,16-17

一般説は神々の食物が天界から地上へと移動する点に言及しない。神々の食物は献供によって地上から天界へと一方的にもたらされるものと考え、「常に食物がある」という点を重視している(→3-1.)。これに対し、ŚB I 6,4では「食物の巡回」と月が再び現れるという現象とを軸に、sāmnāyya と upavasatha との意義付けを述べている(→3-2.)。

神々の食物が地上へと去り、献供によって天界へ戻し返される経緯は第17節に見られる。神々は自分達の食物が再び戻ってくる事を期待し、sāmnāyya を行う人々を当てにする。その結果として、sāmnāyya を献供する者にはこの世では食物が途切れることはなく、更に、「かの世界(死後の世界)」においては「不滅の善業(akṣayyām sukṛtām)」が生じる<sup>27</sup>。この点は、「多くの食べ物を持つ者となる(I 6,4,14, →3-1.)」とだけ述べて死後の事柄に言及しない従来の説と対照的である。

*tād vā etāt | avikṣiṇam evā devānām annādyam pāriplavatē. 'vikṣiṇam ha vā asyāsmiṃ lokē 'nnam bhāvaty akṣayyām amuṣmiṃ lokē sukṛtām yā evām etād vēda. ||16|| tād vā etām rātrim | devēbhyo 'nnādyam prācyavate. tād imām lokām āgachati. tē devā akāmayanta. kathām nū na idām pūnar āgachet. kathām nū idām pārāg evā nā prāṇasyed iti. tād yā evā samnayanti tēṣv āsamsanta. etā evā naḥ sambhṛtya prādāsyantīty. ā ha vā asmint svās ca nīṣṭyās ca śamsante yā evām etād vēda. yō vai paramātām gachati tāsminn āsamsante. ||17||*

その際、この事によって、神々の食べ物がまさしく欠けて減る事のないものとして巡回する事になるのだ。このようにこのことを知っている者、その人にはかくてこの世においては欠けて減る事のない食物が生じ、かの世界においては不滅の善業が[生じる]

27 「善業(sukṛtā-)」とは、具体的には生前に祭主によって「祭られたもの(iṣṭā-)と(布施として)与えられたもの(pūrtā-)」即ち「祭式と布施の効力」iṣṭā-pūrtā-を指すものと考えられる。これが祭主の来世のあり方を決定し、祭主はこの効力が尽きる時に天界からこの世へと再死する。「善業(sukṛtā-) = iṣṭā-pūrtā-」が不滅であるという事は、永遠に天界に留まれる事、即ちamṛta-を意味する。Veda 祭式における iṣṭā-pūrtā-の意義とその展開については：SAKAMOTO-GOTŌ, Junko, “Das Jenseits und iṣṭā-pūrtā- ‘die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten’ in der vedischen Religion” (Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik (2000), pp.476-490; 「iṣṭā-pūrtā- 『祭式と布施の効力』と来世」, 『今西順吉記念論集』(1996), pp.862-882.

のだ。||16|| その際、この夜に神々から食べ物は離れ去るのだ。それはこの世界にやってくる。その際、神々は欲した、「一体どのようにすれば、我々のもとへこれ (=食べ物 *annādyā-*) が戻って来る事が可能だろうか。どのようにすれば、我々のもとからこれが彼方へと消え去ったきりにならずにすむだろうか」と。そこで、他ならぬ *sāṃnāyā* を行う人々、彼らを [神々は] 当てにした、「他ならぬこの者達が我々の為に集め、与えよこすだろう」と。かくて、このようにそれを知っているこの彼を、自分に属する者達 (身内) も他人達 (よその人々) も当てにするのだ。最高の地位へ赴く彼を、人々は当てにするのだ。||17||<sup>28</sup>

#### 4. Vājasaneyin 派の学説の矛盾点と贖罪儀礼

##### 4-1. 164の説明に見られる矛盾点

これまで確認したように、Vājasaneyin 派は、「朔の夜 (に先立つ日中) に *upavasatha* を行う」という従来の説を批判し、朔の夜が明けた日を準備日と定めて *upavasatha* を行うべきであると主張している。その根拠となる理論は、月と同置される *Soma* を *sāṃnāyā* の献供によって天界に返し、循環させるというものである。朔の夜には一晩中月が見えない。その時、月即ち *Soma* が地上の水や草に宿っているのである。*Soma* が入り込んだ水や草を摂取した牛の乳を搾って *Soma* を回収し、*sāṃnāyā* として献供することにより、*Soma* は天界に返され、日没後の西の空に新月が見える。

しかし、この説明には矛盾する点がある。現実には、朔の夜が明けた日の日没直後、西の空に2日目の月 (新月) が現れる。*upavasatha* をしている時に、つまり、献供によって *Soma* が天界に返される以前に月が現れることになり、「献供によって生み出されたものが西の空に見える」という記述と矛盾する。

この問題については、祭式中に生じた過失を贖うための贖罪儀礼 (プラーヤシュチッタ *Prāyaścitta*, プラーヤシュチッティ *Prāyaścitti*) に関する記述から、更なる解明の手掛かりが得られる。定められた日よりも早く (朔より前の夜に) *upavasatha* を行ってしまい、明くる日、本祭を行う予定だった日の、日の出前

28 これに続く ŚB I 6,4,18-21では、*Indra* は太陽、*Vṛtra* は月であり、月が太陽の食物であることと、「ある人々」が *mantra* の中で「*Mahendra* の為に」と発語することについて議論されており、本論とは直接関係しない。『放牧と敷き草刈り』p.164 にテキストと訳がある。

の東の空に月が昇る場合と、定められた日よりも遅く upavasatha を行ってしまい、その日、日没後の西の空に、未だ献供を行っていないのに月が見える場合とに行うべき贖罪儀礼が、ŚB のより新しい部分 (XI 1,4,1 及び XI 1,5,1-5) に述べられている<sup>29</sup>。

#### 4-2. 正しい期日より早く行った場合

##### ŚB XI 1,4,1-3 (ŚBK III 2,3,1-3)<sup>30</sup>

*tād dhāike dr̥ṣṭvōpavasanti | śvō nòdetēty. abhr̥āsya vā hetōr ānirjñāya vāthotōpavasanty. āthainam utābh̥yūdeti. sá yády āgr̥hītām havír abhyudiyāt prājñātam evā tād. eṣāivā vratācaryā. yāt pūrvedyūr dugdhām dādhi havirātāncanam tāt kurvanti. pratiprāmuñcanti vatsāms. tāt pūnar apākurvanti. ||1|| tāt aparāhñe parñāsākhāyāpākāroti. | tād yāthavāidāḥ prājñātam āmāvāsyaṁ havír evām evā. tād yády u vratācaryāṁ vā nòdāsāmseta gr̥hītām vā havír abhyudiyād itarātho tārhi kuryād. etāt evā tañḍulānt sūphalīkr̥tān kr̥tvā só ye 'ñīyāmsas tāt agnāye dātrē 'ṣṭākāpālām puroḍāsām śrapayati. ||2|| ātha yāt pūrvedyūh | dugdhām dādhi tād indrāya pradātrē. 'tha tadānīm dugdhē viṣṇave śipiviṣṭāyaitāms tañḍulān chr̥tē carūrīm śrapayati. carūr u hy evā sá yātra kvā ca tañḍulān āvāpanti. ||3|| tād yād evām bhāvati | eṣā vai sómo rājā devānām ānam yāc candrāmās. tām etād ūpaipsi<sup>31</sup> tām*

29 ŚB 第 XI 巻は、第 I 巻より画然と後の内容を含む。ŚB では 2 つの贖罪法はどちらも第 XI 巻にあるのに対し、ŚBK では第 III 巻と第 XIII 巻との 2 カ所に分けられている。即ち、ŚB は 4-2. と 4-3. との両贖罪法を XI 巻に収録しているが、ŚBK は 4-2. の贖罪法を本体部分の第 II 巻 (~ ŚB I) に近接する III 2,3 に収め、4-3. の贖罪法を第 XIII 巻 (~ ŚB XI) に収めている (→ 表)。ŚBK 第 III 巻は伝統的に Uddhāri-kāṇḍa と呼ばれ、ŚB II 3 と XI 1-3 とを併せた内容を持っている。辻直四郎『現存ヤジュルヴェーダ文献』n.666 参照。ŚB と ŚBK との間にある、成立及び編集過程の差異、両者の影響関係の在り方を反映したものと思われるが、詳しい検討は将来の課題である。

\*ŚB と ŚBK のテキスト箇所対照表

	ŚB	ŚBK
Indra による Vṛtra 殺しの後日譚	I 6,4	II 6,2
4-2. 期日より早く行った場合の贖罪法	XI 1,4	III 2,3
4-3. 期日より遅く行った場合の贖罪法	XI 1,5	XIII 1,2

30 Cf. KātyŚrSū XXV 4,38 (40).

31 Ed. Kalyan-Bombey, Ed. KāsiSktSer. に従う。ŚBK III 2,3,3 も同様に伝承している。Ed.

*ápārātsīt. tám asmā agnīr datā dadāfīndrāḥ pradātā prāyacchati. tám asmā indrāgnī yajñāṃ dattas. tēnendrāgnībhyām dattēna yajñēna yajatē. 'tha yād viśṇave śipiviṣṭāyēti yajñō vai viśṇur. ātha yāc chipiviṣṭāyēti yām upaipsī<sup>31</sup> tám āpārātsīt. tāt chīpitām iva yajñāsya bhavati. tasmāc chipiviṣṭāyēti. tātro yāc chaknuyāt tād dadyān. nādakṣiṇām havīḥ syād īti hy āhur. ātha yadāivā nōdiyād āthopavaset<sup>36</sup>. ||4||*

その際、ある人々は、[月を] 見てから「明朝は [月が] 昇らないだろう」と [考えて] *upavasatha* を行う。雨雲の故に、或るいは [正しい月齢を] 判別できない為に、一方では (*āthotā*) *upavasatha* を行い、だが他方では (*ātha*) 当人 (祭主) の上に、やはり (*utā*) [月が] 昇る<sup>32</sup>。その際、もし供物が (未だ) 手に取られていない時に [月が] 昇る場合、それ (供物) は準備されている<sup>33</sup>ものと同一である。(その際) 他ならぬ次のような *vrata* の実行がある。前日に (即ち、誤って *upavasatha* を行った日に) 搾乳された酸乳 [となったもの]、それを供物を固める物として彼らは用いる。彼らは仔牛達を [母牛へと] 一緒にさせる。それら (仔牛達) を彼らは再び [母牛から] 引き離し [母牛を放牧させる]<sup>34</sup>。||1|| それら [仔牛達] を午後、バルナ *Parṇa* 樹の枝を用いて [彼は] [母牛から] 引き離し [母牛の乳を搾る]<sup>34</sup>。その際、まさしく、新月に属する供物として準備されているように、まさしくそのように [献供が為される]。その際、もし、他方、(前述の) *vrata* の実行を取えてしないとしたり、或いは供物が (既に) 手に取られた時に [月が] 昇る場合、その場合には他方、別なように行われるべきである。他ならぬこれらの玄米 (麦) 達を十分に脱穀されたものと成してから、それから、比較的細かい [玄米 (麦)] 達があれば、それらを「与える者たる *Agni*」の為に 8 皿分の *pa-*

*WEBER* は *upaitsīt* とし、p.1193において *upaitsīt* (*upa-ardh/rdh* の *Desid.* の *Aor.*) に訂正している。

- 32 「明日は月が昇らないだろう」と見て *upavasatha* を行うことを、必ずしも非難していないかのように記されている。対応する *SBK* III 2,3,1では *vā* の位置が異なる：*dṛṣṭvā vaike upavasanti śvo nōdetēti vābhrāsya vā hetōr nā nirjānanty āthābhyudeti* 「或いは、ある人々は [月を] 見てから『明日は昇らないだろう』と [考えて] *upavasatha* を行い、或いは雨雲の故に [正しい月齢を] 識別しない。すると、[翌朝も] 月が昇る」。
- 33 *prājñātam*。当該箇所では「準備されている」と訳した。元来は「行く末を理解して予め設備しておく」意味であったかと思われる。中村隆海「Veda 文献における *prā√jnā* の語義と用法」p.125f., 5-4 (『松波誠達先生古稀記念梵文学研究論集』pp.111-138, 2007) 参照。
- 34 *brāhmaṇa* における *apa-ākar* の用例とその分類については、cf.『放牧と敷き草刈り』p.115ff.

ンケーキへと加熱する。||2|| 次に、前日に搾乳された酸乳があれば（前日に搾乳された乳が酸乳となっていれば）、それは「授ける者たる Indra」の為に [用いられる]。そして、その時、搾乳された [乳] の中で、（即ち）加熱された乳の中で、「シビヴィシュタ Śipiviṣṭa<sup>35</sup>たるヴィシュヌ Viṣṇu」の為に [比較的大きい] 玄米（麦）達を、粥へと加熱する。玄米（麦）達を人々が撒き入れる時は如何なる時にも、他方、それはまさしく粥 [となりうる] から。||3|| その際、そのようになるとしたら（=本祭日の明け方に有明の月が昇るとしたら）——輝く月であれば、これが Soma, 神々の食物なのだ——それ（Soma）をこのことによって [祭主は] 獲得しようとした。（しかし）それを逸した。それ（Soma）をこの者（祭主）に与える者たる Agni が与える。授ける者たる Indra が授ける。それをこの者に Indra と Agni とは祭式として与える。そういう Indra と Agni とから与えられた祭式によって [祭主は] 祭る。次に、〈Śipiviṣṭa たる Viṣṇu の為に〉と [唱える] のは、Viṣṇu は祭式なのだ。そして〈Śipiviṣṭa の為に〉と [唱える] のは、[Viṣṇu が] 獲得しようとしたもの、それを [Viṣṇu は] 逸した。それは祭式の、丁度 śipita<sup>35</sup>なものとなった。それゆえ、〈Śipiviṣṭa の為に〉と [唱える]。他方、その場合、[祭主が] できることがあり得るならば、それを [祭官に報酬として] 与えるべきである。「報酬のない献供は存在しない」と人々は言うから。従って（いずれにしても）、まさしく [(土翌朝に) 月が] 昇らないであろう、その時に upavasatha を行うべきである<sup>36</sup>。||4||

「明朝は月が昇らないだろう」と状態を見て、即ち、今日が朔の夜だと思って upavasatha を行い、その予測を誤り、本祭当日の日の出前に東に月（有明の月）が昇ってしまった場合の贖罪法である。正しい期日より早く upavasatha を行ってしまったことになる。

この場合は「供物が未だ手に取られていない場合」と「供物が既に手に取られている場合」との2つの状況を想定し<sup>37</sup>、2通りの贖罪法を定めている。前

35 *śipiviṣṭa-* 及び *śipitā-* の語義は不明である、cf. MAYRHOFER EWaia s. v. *śipiviṣṭā-*。また、KRICK *Das Ritual der Feuergründung* (Wien 1982), p.486 n.1315も参照せよ。

36 「upavasatha を行ってもよい」という許可の Opt. とも解される。

37 「供物を手に取る」とは、パンケーキ、乳製品などの材料や実物を手に取りながら献供対象となる神格の名を挙げる行為を謂うものであると考えられる。これから準備する、或いは準備したパンケーキ等が、日常の食事の為のものではなく、神々に捧げる供物であることをはっきりと明示することを意図したものであろう。Cf. ŚB I 7,1,6 *〈āpyāyadhvam aghnyā indrāya bhāgām (VS I 1)〉 iti | tād yathaiṣā dō devātāyai havir gṛhṇān ādiśaty evām evātād devātāyā ādiśati yād āh-* *〈āpyāyadhvam aghnyā indrāya bhāgām〉iti* 「〈君達は [乳で] 膨らめ、傷つけられざるべき牝牛達よ、Indra

者には、前日に搾乳して酸発酵させた乳をハヴィルアータンチャナ *haviṛātāncana-* (供物を固めるもの：種菌，スターター) として用い、本来の *upavasatha* の日に放牧儀礼を、夕方に搾乳と酸乳製造の儀礼を行う。後者の場合は「与える者たる Agni」に対してパンケーキを、「授ける者たる Indra」に対して酸乳を、「Śipiviṣṭa たる Viṣṇu」に対して乳粥を、捧げる。

3-1. 及び3-2. で見たとおり、I 6,4,14では「明朝は月が昇らないだろう」と判断して朔の夜に先立つ日中に *upavasatha* を行うことを否定していた。一方、本節で扱う XI 1,4,1は全く同じ表現を用いて、判断に誤りがあった場合の贖罪法を示す。つまり、XI 1,4,1ではI6,4と異なり、朔の夜に先立つ日中に *upavasatha* を行うこと自体は否定されていない。また、贖罪法を定めていることは、Vājasaneyin 派が「明朝は月が昇らないだろう」と判断して *upavasatha* を行うことが現実にあったことを裏付けている。更に、「供物が未だ手に取られていない場合 (cf. n.37)」には、誤りに気づいた日、即ち朔の夜直前の晩に再び搾乳儀礼を行うべきであると述べられている。他学派と同じ日程で *upavasatha* を行っても Soma の回収が可能であると考えられていたことを示唆している。朔の夜に先立つ日中に *upavasatha* を行う場合には、「献供から月が生み出される」という記述は現実の月の見え方と矛盾しない。「朔の夜が明けた日中に *upavasatha* を行うべきである」と主張した I 6,4 の Soma の循環理論が、何らかの形で改変されているものと推測されるが、「供物が既に手に取られている場合」の贖罪法では Soma の回収に失敗したものとされており、明確な理論化には至っていなかったものと思われる。これに対する対策については、次節4-3. で詳しく論じたい。いずれにせよ、Vājasaneyin 派の祭官も他学派と同様、朔の夜に先立つ日中に *upavasatha* を行っていた（朔の夜に先立つ日中を前祭の日として放牧および搾乳を行っていた）と考えられる。

類似する贖罪法が、Vājasaneyin 派に先行する黒 YV 学派 (MS 及び TS) 等に伝えられている：MS II 2,13:25,3-7<sup>p</sup> [願望祭, cf. CALAND Zauberei p.100-101,

の為に分け前となるべく)と [唱える]。その際、恰も、別の場合に、供物を手に取りながら神格へと指定するように、正しく同様に、神格 (Indra) へと指定することになる、〈君達は [乳で] 膨らめ、傷つけられざるべき牝牛達よ、Indra のために分け前として)と唱える、このことよって」。→『放牧と敷き草刈り』p.80f. 当該箇所 (XI 1,4) では、本祭当日の朝に、献供対象となる神格 (Indra) を挙げて搾乳することを指しているものと考えられる。

N.155] ~ TS II 5,5<sup>p</sup> [新月祭・満月祭, 神学議論] ~ KB IV 2 [新月祭・満月祭, 補遺] ~ GB II 1,9 [新月祭・満月祭]。この中, MS が贖罪儀礼の記述を願望祭の章に収めている点は, 文献の編集や祭式の整備過程を考察する上で別に検討を要する。Vājasaneyin 派以外の学派の贖罪法について, 例えば:

MS II 2,13:25,3-7<sup>p</sup> [願望祭]<sup>38</sup>

<sup>[25, 3]</sup> *yāsya sāmnāyāṃ candrāmā abhyudiyād ye puroḍāsyāḥ syús tāmś tredhā*  
<sup>[4]</sup> *kuryād. ye madhyamās tām agnāye dātré 'ṣṭākāpālam nīrvaped. ye sthāviṣṭhās*  
*tā-* <sup>[5]</sup> *m īndrāya pradātré dadhāmś carūm. ye kṣōdiṣṭhās tām viṣṇave sipiviṣṭāya* <sup>[6]</sup>  
*śrīte carūm.*

その人(祭主)の sāmnāya の上に月が昇る場合, もしパンケーキに関するもの達(材料: 玄米・麦)があるならば, それらを3通りにする(分ける)べきである。中くらの [大ききの] [玄米・麦] 達, それを8皿分の [パンケーキ] として「与える者たる Agni」の為に準備して捧げるべきである。最も大きい [玄米・麦] 達, それを「授ける者たる Indra」の為に, 酸乳の中で粥として [準備して捧げるべきである]。最も細かい [玄米・麦] 達であれば, それを「Śipiviṣṭa の Viṣṇu」の為に, 熱した乳の中で粥として [準備して捧げるべきである]。

#### 4-3. 正しい期日より遅く行った場合

ŚB XI 1,5,1-5 (ŚBK XIII 1,2)

*ādyāmāvāsyeṭi mānyamāna upavasati. āthaiśā paścād dadṛṣe. śa haiśā divyāḥ*  
*śvā. śa yājamānasya paśūn abhyāvekṣate. tād apaśavyām syād āprāyascittikṛta.*  
*etāsmād u haiṭād bhīṣā 'vacandramaśād iti. ||1|| chāyām upasarpanti. eteno haitād*  
*upatāpad ācakṣate śvalucitam ity. etām u haivaitād ācakṣate. ||2|| śaśās cāndramaśā*  
*īti. candrāmā vai sōmo devānām ānam. tām pauraṃmāsyām abhīṣuṅvanti. sō*  
*'parapākṣe 'pā ośadhīḥ prāviṣati. paśavo vā apā ośadhīr adanti. tād enam etām rātriṃ*  
*paśubhyaḥ sāmnyayati. ||3|| sō 'dyāmāvāsyeṭi mānyamāna upavasati. āthaiśā paścād*  
*dadṛṣe. tād yājamāno yajñapathād eti. tād āhuḥ kathāṃ kuryād itvā yajñapathād.*  
*yājetā nā yājetā īti. yājeta haivā. nā hy anyād apakramaṇaṃ bhāvati. śvāḥśva evaiśā*

38 Cf. MānŚrSū V 1,10,55-60. 更に, MS II 2,13:25,7-14<sup>p</sup> [願望祭] では, sāmnāya の上に月が昇ることを Soma の残余と関連づけて, 3つのパンケーキの献供を贖罪法として定めている。Cf. CALAND Zauberei p.101, N.156; 『放牧と敷き草刈り』 p.117.

*jyāyān údeti. sá āmāvāsyaividhenaivēṣṭvāthēṣṭim anu nīrvapati tād áhar vaivá śvó  
 vā. ||4|| tásyai trīṇi havīmṣi bhavanti. agnāye pathikīrte 'ṣṭákāpālaṃ puroḍāśam  
 índrāya vṛtraghnā ékādāśakapālam agnāye vaiśvānarāya dvādaśakapālam  
 puroḍāśam. ||5||*

「今日が朔の夜だ」と考えて〔人は〕 upavasatha を行う。だが他方では (átha), この〔新月〕が西に見えている。つまりこれ(新月)は、かの、天に属する犬である。それ(犬)は祭主の家畜達を狙っている。贖罪法がなされない場合には、家畜達にとって為にならないことが起きることになる。他方、かくて、このことによって、この「月の下」ということを恐れて、(次節に続く) ||1|| 「人々ないし家畜達は」影へと身を寄せる。他方、また、この脇で熱しているもの(細く光って見えている部分)を〔人々は〕呼ぶ、「犬のかき傷」と。他方、また、この際、これ(満月)を〔人々は〕呼ぶ、(次節に続く) ||2|| 「月に属する兎」と。月は神々の食物たる Soma なのだ。その〔Soma たる月〕に〔神々は〕満月の夜に圧搾を加える。それ(Soma)は後半の(欠けてゆく)半月に、水達に〔そして〕草達に入り込む。家畜達は水達を〔そして〕草達を食べる。その際、〔人は〕当のもの(Soma たる月)をこの夜に、家畜達を通じて集め寄せる。 ||3|| さて(sá), 「今日が朔の夜だ」と考えて〔人は〕 upavasatha を行う。だが他方では (átha), この〔月〕が西に見えている。その際、祭主は祭式の道筋から〔逸れて〕行く。それについて〔人々は〕言う、「祭式の道筋から〔逸れて〕行った後には、どのようにすべきだろうか。祭るべきだろうか、祭るべきでないだろうか」と。まさしく祭るべきである。他のものは逃げ道とならないから。まさしく翌日また翌日と、この〔月〕はより力強い(大きい)ものとなって昇る。その際、ほかならぬ朔の夜に属する(：新月祭の)規定に従って祭ってから、それから更に穀物祭〔の供物であるパンケーキ〕を準備して捧げる、ほかならぬその日に、或いは翌日に。 ||4|| その〔穀物祭〕には3つの供物達が用いられる、(即ち)「道を作る Agni」の為に8皿分のパンケーキが、「Vṛtra 殺しの Indra」の為に11皿分の〔パンケーキ〕が、アグニヴァイシュヴァーナラ Agni Vaisvānara の為に12皿分のパンケーキが。 ||5||

4-2. と同様、「今夜が朔の夜だ」と考えて upavasatha を行い、その予測が誤りだった場合の贖罪法である。本節で扱うのは、正しい期日より遅く upavasatha を行うという過失に対する規定である。この場合は本祭前日の日没時に西の空に新月(2日目の月)が見えることにより、予測が誤りであったことが明らかになる。その際は規定通りに新月祭を挙行し、同日、またはその翌



日に、贖罪儀礼として3つのパンケーキを献供する。

3-2.に見たとおり、朔の夜に一晩中見えなかった月が新月として日没後西の空に現れることを、ŚBでは「献供によって Soma が天に生み出される」と解釈している。これを根拠として「朔の夜が明けた日に upavasatha を行うべきだ」と主張する。ところがその主張どおり upavasatha を行うと、その日の日没後に新月が見えることになる。翌日の本祭で献供を行った後、日没後に現れる月は、3日目の月なのである（→図3）。

この贖罪法は、単純に日を数え間違えた場合に限らず、I 6,4の主張通り upavasatha を行った結果新月が見えてしまうという、神学議論を優先させた為、に生じた過失に対処するものであるとも考えられる。

しかし、XI 1,5の Soma 循環理論と I 6,4のそれとの間に、注目すべき相違点がある。I 6,4,5（→1-2.）には *sá yátraisá etām rātrim ná purástān ná páścād dadṛṣe tād imám lokám āgacchati* 「そこで、これ（＝月）がこの夜の間東にも西にも見えていない時には、その時、[月は] この世界へやってくる」とある。朔の夜に Soma たる月が地上に降りてくるので、朔の夜が明けた日中を準備日として牛達を放牧に出し、夕方と翌朝とに搾乳して Soma の入っている乳を得る必要があった。ところが、XI 1,5,3では *candrāmā vai sómo devānām ānnaṃ. tāṃ paurnamāsyām abhīṣuṅvanti. sò 'parapākṣe 'pā oṣadhīḥ prāvīṣati* 「月は神々の食物たる Soma なのだ。その [Soma たる月] に [神々は] 満月の夜に圧搾を加える。それ (Soma) は後半の (欠けてゆく) 半月に、水達に [そして] 草達に入り込む」、つまり、「月が欠けてゆく半月間に Soma が地上に降りてくる」と述べられている。故に、朔の夜が明けた日中ではなく、朔の夜に先立つ日中に放牧を行っても Soma の回収が可能になる。

ここから、ŚB I 6,4で述べられた Soma の循環説が XI 1,5において改作されていることが明らかになる。I 6,4の理論に則って upavasatha を行うと、献供する以前に西の空に月が現れてしまう。「献供によって月が再び空に現れる」という献供を媒介とする月＝Soma の循環説が破綻しないよう、朔の夜に先立つ日中の upavasatha 開始を合理化する必要がある。その為に、Soma が地上に降りてくる時を朔の夜から月が欠けてゆく半月に修正したものと考えられる。

前節 XI 1,4（→4-2.）において議論されていた贖罪法では、朔の夜直前の晩の搾乳と、直後の朝の搾乳とによって供物を準備し、献供することを定めてい

る。他学派と同じ日程で upavasatha を行うことになる。その背景には、Soma 循環理論の改作が関与している可能性があるものの、未だ明確には理論化されていない可能性もある。ŚBK が4-2.の贖罪法を第 III 巻に収めていることから、これを巡る議論は4-3.よりも古い要素を含んでいるものと推測される(→ n.26)。I 6,4から XI 1,4を経て XI 1,5へと至る一連の議論によって、Soma 循環理論の段階的整備過程を跡付けることが可能になる。

なお、他学派においては「新月祭・満月祭を挙行せず定められた期日を過ぎてしまうこと」が贖罪法の対象となっている：MS II 1,10:11,13-15<sup>p</sup> [願望祭, cf. CALAND Zauberei p.47f., N.66] ~ KS X 5:129,3-9<sup>p</sup> [願望祭] ~ TS II 2,2<sup>p39</sup> [願望祭] ~ AB VII 8 [新月祭・満月祭, 補遺] ~ KB IV 3 [新月祭・満月祭, 補遺] ~ GB II 1,13 [新月祭・満月祭]。MS では、4-2.の贖罪法と同様、願望祭の章に贖罪法の記述が収められている。これらの中で、KB は ŚB と同様、西の空に月が見えることを明記する。それ以外は、「朔の夜、又は満月の夜を過ぎてしまった場合」の贖罪法とする。何れの場合も供物は「道を作る Agni」に対する 8 皿分のパンケーキのみである。例えば：

MS II 1,10:11,13-16<sup>p</sup> [願望祭]<sup>40</sup>

<sup>[11.13]</sup> *agnāye pathikṛte 'ṣṭākapālam nīrvaped yāsya prājñātēṣṭir atipādyeta. ba-* <sup>[14]</sup> *hiṣpathām vā eṣā eti yāsya prājñātēṣṭir atipādyete. 'gnīr vai devānām pathi-* <sup>[15]</sup> *kṛt. tām evā bhāgadhéyenópāsarat. sā enam pānthām āpinayaty. anaḍvān dākṣiṇā. sā* <sup>[16]</sup> *hī pānthām apivāhati.*

その人の準備されていた (→ n.33) 穀物祭が [正しい期日を] 越えてしまう (正しい期日より後に行われる) としたら、「道を作る Agni」の為に 8 皿分の [パンケーキ] を準備して捧げるべきである。その人の準備されていた穀物祭が [正しい期日を] 越えてしまうとすれば、この人は道から外れて行くのだ。Agni は神々の中で道を作る者なのだ。他ならぬ彼 (Agni) に、[彼の] 取り分を伴って助けを求めて走ったことになる。彼は当の者 (祭主) を道の中へ導く。荷役牛が報酬である。それは道の中へと戻って運

39 Cf. BaudhŚrSū XIII 3; ĀpŚrSū IX 4,1-5; IX 1,20-21. 更に、TS II 2,5<sup>p</sup> [新月祭・満月祭, 神学議論] では、新月祭・満月祭を祭る者でありながら挙行しないうちに朔の夜または満月の夜が過ぎてしまうことを祭主が天界から切り離されることと関連づけ、Agni Vaiśvānara に 12 皿分のパンケーキを献供することが定められている、cf. CALAND Zauberei p.21, N.30; BaudhŚrSū XIII 8.

40 Cf. MānŚrSū V 1,7,27-28.

ぶから。

## 5. まとめ

Indra による Vṛtra 殺しの後日譚は、「力を失った Indra を回復させる」という主題の下、様々な祭式における供物の因縁譚に用いられた(→ n.6)。sāmñāyya の由来としてのそれは、YV 古層の brāhmaṇa にまで遡ることができる (MS, KS → 0. 及び n.7)。ただし、それは新月祭とは異なる祭式の brāhmaṇa 中に語られるものである。新月祭の文脈では、TS において初めて語られる(→ 0.)。この TS の神学議論は、ŚB に引き継がれた(→ 1-2.)。

ŚB に至っては、sāmñāyya は Indra を回復させるための滋養にとどまらず、神々の食物たる Soma の循環と結びつけられた。Soma と月を同一視する観念を基盤として、月の満ち欠けを Soma の循環と連動させる思弁が用意されていたのである(→ 2. 及び 3-3.)。

Vājasaneyin 派は ŚB I 6,4 において、Soma の循環理論に基づく新しい祭式のやり方を提唱した。朔の夜に Soma が地上におりてくるのだから、朔の夜が明けた日中に upavasatha を行い、その日の朝の放牧と夕方の搾乳及び翌朝の搾乳によって Soma を回収する(→ 3-2.)、それを献供すると、その結果、月は献供から生み出されて西の空に見える、と主張する(→ 3-3.)。いつ upavasatha を行うかという問題は、いつ放牧し、搾乳をすれば Soma を回収できるのか、という問題に置き換えられる。しかし、この主張通り upavasatha を行うと、献供から生み出されるはずの月が既に upavasatha の夕方に現れてしまう(→ 4-1.)。

朔前後の月は大変見づらい。気象条件によっては全く見えない。本祭日に現れる 3 日目の月を新月と誤認していたのかもしれない。ただし、この場合には暦日の正しい把握に支障を来す。

結局、独自の Soma 循環理論に基づく新しい祭式の方法は貫徹せず、他学派と同様、朔の夜に先立つ日中に upavasatha を行っていた可能性がある。すなわち、ŚB 第 XI 巻の贖罪法の記述によると、新月祭挙行の際には本祭日の明け方に有明の月が見えてはならず(→ 4-2.)、また upavasatha の日の夕方に新月が見えてはならない(→ 4-3.)。つまり、他学派と同じ日程で新月祭を行う必要がある。I 6,4 では、Soma が地上に降りてくる時を朔の夜としていた。そのため、朔の夜が明けてから放牧と搾乳とを行わなければ、Soma を回収するこ

とができない。この問題を巡って、Vājasaneyin 派独自の Soma 循環理論が段階的に整備されてゆく過程を跡付けることができる。4-2. (ŚB XI 1,4 ~ ŚBK III 2,3) に関する議論の段階を経て、4-3. (ŚB XI 1,5 ~ ŚBK XIII 1,2) を巡る議論では、「月が欠けてゆく半月間に Soma が地上に降りてくる」という、より自然な解釈に基づく修正がなされる。この修正は、upavasatha 開始日の設定と Soma 循環理論との間に生じた齟齬を解消し、「神々の食物となる供物の循環」という視点から新たな思想の展開を準備するものであったと思われる (→ n.9)。

### 略号表

**AB** : Aitareya-Brāhmaṇa, Ed. AUFRECHT, Th., Bonn 1879; **ĀpŚrSū** : Āpastamba-Śrauta-Sūtra, Ed. GARBE, R., Calcutta 1882, 1885; **BaudhŚrSū** : Baudhāyana-Śrauta-Sūtra, Ed. CALAND, W., Calcutta 1904-1924; **GB** : Gopatha-Brāhmaṇa, Ed. GAASTRA, D., Leiden 1919; **KātyŚrSū** : Kātyāyana-Śrauta-Sūtra, Ed. WEBER, A. Berlin-London 1859; Ed. Pandit Nityānanda Panta Parvatiya (pt.1), Benares 1928; Pandit Gopāl Sāstri Nene and Dogrā Anantrām Sastri (pt.2). 1939; Ed. Pandit Śrī Vidyādhara Sarmā, Benares City 1933-1937(?); Ed. (XV まで), UH. G. Ranade, Poona 1978; **KB** : Kauśītaki-Brāhmaṇa, Ed. LINDNER, B., Jena 1887; **KS** : Kāthaka-Saṁhitā, Ed. SCHROEDER, L. von, Leipzig 1900-1910; **MS** : Maitrāyaṇī Saṁhitā, Ed. SCHROEDER, L. von, Leipzig 1881-1886; **RV** : Ṛg-Veda, Ed. AUFRECHT, T. Bonn 1877; **ŚB** : Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina) : Ed. WEBER, A. Berlin-London 1855; Ed. Kalyan-Bombay 1940; **ŚBK** : Śatapatha-Brāhmaṇa (Kāṇva), Ed. CALAND, W. Lahore 1926, 1939; **TB** : Taittirīya-Brāhmaṇa, Ed. ĀnandāśramaSkt. Ser. 37. 3rd ed. Poona 1979; **TS** : Taittirīya-Saṁhitā, Ed. WEBER, A., Leipzig 1871, 1872. (Indische Studien 11, 12) ; Ed. ĀnandāśramaSkt. Ser. 42. Poona 1940-1951.

# 論集

第34号

第50回学術大会記念号

2007

印度学宗教学会